プロジェクトドキュメント 2025-26

◉2025年4月25日｜山形より

始まりは新年度最初のミーティングでのことだった。東日本大震災を挟んだこれまでの活動をメンバーに紹介し、
今年度の動きを検討する会が開かれていた。そこで新入生の菅野すみれが4歳で震災を経験し、その後の復興活動がそのまま
彼女の小中高の活動に繋がると話した。また、2年生の佐藤凛静が震災直後に被災地で見てしまった忘れ難い風景について語った。
これ以降の若い世代にとって、東日本大震災の経験は、もうリアルなものとして共有できなくなるものなのだと知った。
そういえば来年で大震災から15年の節目を迎える。全国各地から東北に集まってきた私たちが、
様々な視点や距離感をもってどのような記憶を残せるのかはわからないが、
今年は浜通りに出ようかという機運が生まれた日だった。

◉2025年5月24日｜日本海より

昨年より、鶴岡の龍王尊善寶寺から展覧会開催の依頼を受け、
日本海側の「龍にまつわる伝説」のリサーチを進めていた。
善寶寺は海の守護神・龍神の寺として全国的に知られており、五百羅漢堂に安置される500体の仏像保存修復事業を通して、
東北芸術工科大学と深い関係を築いてきた。龍神信仰の寺として、航海安全や大漁を祈願する漁業関係者などから信仰を集めた善寶寺を、
庄内地域の気候風土を含めて描けないか? という試みは始まっていた。ハマカルアートプロジェクトについて知ったのもちょうどこの頃。
信仰を通して日本海と太平洋の文化を繋げることができないだろうか? という挑戦として参加を表明することにした。

◉2025年9,11月｜浜通りより③

「みんなの交流館 ならはCANvas」での滞在制作や、
浜通りでのフィールドワークは計3回行われ、
地域の方々との交流や浜通りのリサーチ活動が展開された。
丸一日滞在していると、開館から閉館までずっと居られる方や、
趣味のサークルの集まり、放課後にやってくる小学生たち、
勉強に励む受験生、子育て中のお母さんなど、
この場所が地域にとって大事な場所だということがよくわかる。
古くから暮らす地元の人や新たな移住者などに、
様々な視点を聞いたり描いたりする時間を過ごした。

—

滞在制作・フィールドワーク
①9/13,14,15 参加者: 大谷颯斗、佐藤凛静、林雲昕、村上悠惟、菅野すみれ、青木みのり、三瀬夏之介
②9/25,26,27,28 参加者: 宮澤亮多、佐藤凛静、古山果歩、菅野すみれ、青木みのり、三瀬夏之介
③11/29 参加者: 菅野すみれ、佐藤凛静、大谷颯斗、林雲昕、村上悠惟、多賀糸尊、三瀬夏之介

◉2025年8月9日｜浜通りより①

ハマカルアートプロジェクトの採択が決まり、今回のプロジェクトリーダーは
相馬市出身の菅野すみれ、副リーダーはいわき市出身の佐藤凛静に決まった。
採択事業者・学生・経済産業省・専門家が集まり、浜通り12市町村地域の背景や
実践の視点を共有するためのキックオフミーティングが、福島第一原発から程近い、
まだ帰還困難区域の残る大熊町の産業交流施「CREVAおおくま」で開催された。
車窓からは、立ち入り禁止を示すバリケードや自然に飲み込まれてしまった
住居などが見える。ミーティングでは、採択された13のプロジェクトの自己紹介から始まり、
参加メンバーたちも各々の距離感や視点を交えながら、
このプロジェクトに参加する思いを話した。

—

参加者: 宮澤亮多、大谷颯斗、村上悠惟、佐藤凛静、林雲昕、菅野すみれ、三瀬夏之介

◉2025年8月10日｜浜通りより②

次の日は、滞在場所を探すために楢葉町を訪れた。まずは「楢葉町地域活動拠点施設 まざらっせ」へ。
駅から少し離れた、のんびりとした場所にある元保育所をリノベーションした施設には、
アトリエ、展示スペースなどがあり、かなりいいのでは!! とメンバー一同盛り上がる。
続いて同じく、一般社団法人ならはみらいが運営する「みんなの交流館 ならはCANvas」へ。こちらは、元々田んぼだったところに、
商業施設と共に作られた大型の交流施設。地域の方々の要望を取り入れるためのワークショップを設計段階から
実施していることもあってか、バンドルームや調理室、地域の象徴的な「ほとときず山」を見るための和室などが備えられている。
新しい建物ではあるものの、そこかしこに震災で出た廃材や、廃校で使われなくなった教室の椅子を使用していたりと、
震災の記憶を刻もうとする姿勢が見られる。一階にある多目的室が滞在制作に使えることがわかり、
商業施設利用の方々も含めた多くの人たちと交流できる可能性があるのでは? と、
まずはここを本拠地に進めていこうとメンバー一同で決めた。

◉2025年10月〜2026年1月｜山形より①

浜通りでの経験を出発点に、大学での制作が立ち上がる。
西洋美術には「月暦画」という表現がある。1年12か月それぞれの月を、
記念される聖人像や動物、その月々の労働、そして自然の風景によって描き出すものだ。
この形式を手がかりに、12か月の神々・12星座のイメージへ東北の自然や営みを重ね、地域の歴史までも描き込む
共同制作「月暦画」を制作してきた。そこには、浜通りで過ごした時間の記憶も丁寧に描き加えられていく。
当たり前のように巡る四季の有り難さは、震災によって改めて気づかされたものでもある。
屏風のように自立する「月暦画」は、会場に立ち上がり、来場者を迎え入れるだろう。

月暦画 2024〜
制作: 狩野宏明、多賀糸尊、齋藤穂乃歌、宇田川栞、稲倍美彩希、中田怜、板鼻咲葉、蟻塚唯衣、小林真綾、林雲昕、大谷颯斗、
木村小春、花輪ひなた、大島彩華、佐藤真優、郷田杏香里、日野奈菜花、島袋莉帆、村上悠惟、坂本寛人、石山菜々海、菅野すみれ、三瀬夏之介

◉2025年10月〜2026年1月｜山形より②

月暦画と並行して、チーム「かざぐるま」による山形・庄内地域でのリサーチをもとに龍神信仰を描く新作屏風「龍脈図屏風 」の制作も始まる。
東北は水の信仰が息づく土地である。縄文時代から実りをもたらす命の水は、人々にとって尊い信仰の対象であると同時に、
天災をもたらす畏怖の対象でもあった。本作「龍脈図屏風」は出身地の異なるチームメンバーが、山形の大学に入学したことをきっかけに出会った、
東北の豊かな自然と水にまつわる信仰を絵画として表現しようと試みたものである。浜通りは、東日本大震災において津波による自然災害と、
福島第一原子力発電所事故による原子力災害の被害を受けた土地である。水は命を育み、恵みをもたらす一方で、一瞬にして命を奪う存在でもある。
私たちは太古から現在に至るまで、水がもつこの無常の性質と向き合い続けてきた。
その畏敬と祈りのかたちは、各地における龍の信仰として、今もなお静かに息づいているのではないだろうか。

—

「龍脈図屏風」（左隼:善寶寺雲龍、右隼:竜宮城海神）
中田怜、村上悠惟、金城海夏人、小森亜留斗、坂本寛人、田中紫月、岩清水富太　表具: 秋葉春光堂

image photo: Ryan Lowe / background of this page and design: Yuka Yamaguchi (Yuma + design)

写真（表紙〜この頁の背景）: 東北芸術工科大学 アトリエでの制作風景より